Report

COMMUNITY MONEY

# 地域通貨の愉しみ

北海学園大学法学部助教授

樽見　弘紀

## はじめに

この雑誌の読者のなかで、「地域通貨」という言葉を一度も耳にしたことがない、という方は案外少ないのではないかと思う。実は日本でこの地域通貨という言葉が使われ始めて僅か数年しか経たないのであるが、その実践は驚くほどの速度で全国に蔓延しつつある。ましてや実践事例や検討中の事例が20や30はあるだろう「地域通貨先進地域」の北海道である。地域通貨の流通を目の当たりにした、あるいは実際に使ってみた、という人はまだまだ稀かもしれないが、その気になりさえすれば参加可能な地域通貨のサークルはそこここにできている。

あるいは、「エコマネー」という言葉を地域通貨と同義でお使いの方も多いことと思う。北海道に住む者にとっては栗山町というエコマネー実践の、いわば「モデル地区」の紹介を新聞やテレビ等でたびたび見聞きする。エコマネーとはもともと、通産省（現在の経済産業省）にお勤めの加藤敏春さんという方が提唱された地域通貨の一方式、つまり固有名詞である。これに対して、地域通貨はエコマネーをも包摂する一般名詞である、というのが両者の関係とご理解いただければいい。要は、地域通貨と呼ぼうが、エコマネーと呼ぼうが、どうやら我々がこれまで常識と考えてきた「通貨の発行権は一国の覇権の一部である」という常識を覆すような、面白い試みが世界中のさまざまなコミュニティで同時多発的におこっているらしい。そして、日本もまた、その例外ではないのである。

## 人が根づかない地域のための通貨

地域通貨実践の先行モデルとしてよく取り上げられるのが、アメリカ・ニューヨーク州のイサカ市の事例である。

ポール・グローバー氏：「町にも、自分にもドルがなかったから、自分たちのおカネを刷ってみた」

イサカ市は人口３万人ほどの比較的規模の小さな都会である。ある方の目の子算によれば「３万人の内訳は、半分が大学生、残りの半分が地元住民」といえるらしい。アイビーリーグの一校として名高いコーネル大学やイサカカレッジに通う「学生」は、いわばこの町一番のマジョリティである。このマジョリティはしかし、イサカ市に根づかない。大半は学校に用事がなくなればこの町からいなくなってしまうからである。学校の卒業、すなわちコミュニティの卒業という訳だ。イサカが地域通貨という、いわば新しいコミュニケーションの道具の発信地になったことは、そんな事情とも無関係ではないかもしれない。

ここでの地域通貨の創始者、ポール・グローバー氏がどのような経緯でこの町にやってきたのか、については不覚にも訊き逃した。しかしながら重要なのは、このポール・グローバーという男が1991年、はじめイサカマネー、のちにイサカアワーズ（直訳するならば「イサカの時間」）と呼ばれることになるおカネを突如、発行し始めたという紛れもない事実である。グローバーは、１アワーを10ドルと勝手に決めると、持ち前の器用さで紙幣のデザインを自ら考え、印刷し、そして周囲の誰彼とつかまえてはこう言ったのである。

「ほら、イサカの新しいおカネだ。受け取ってみないか？」

## 町に留まるおカネ

当時、なぜグローバーが「イサカ市の中心部から20マイル四方で通用するおカネ」をつくったのか、についてはグローバー自身が答えを用意していた。彼いわく、「（イサカアワーズを考案した）当時、アメリカは長い経済の停滞期にあった。不況はイサカとて例外ではなく、多くの人々は失業しているか、不満足な就労に甘んじているかのいずれかであった。そんなイサカはおよそ国家通貨であるドルとは縁遠く、仮にドルがこの町にやってきてもするりと素通りするだけだった。我々は中央に吸い上げられないおカネ、イサカに留まるおカネを心から欲していたのである」。地域通貨の第１の特徴が、「町（＝コミュニティ）に留まるおカネ」であるということ、このグローバーの言葉でよく分かる。

イサカアワーズ（1/4アワー札）：「世界ではじめて子供が肖像のおカネである」とはグローバー氏

## 地域の人々の勤労に支えられているおカネ

グローバーの考えたイサカアワーズの骨子はこうだ。まず、１アワーはイサカ市における平均的な時給10ドルに相当する（ことにする）。人は皆、１時間働くことで１アワーを貰う権利を有するという訳である（先に書いたように１アワーは10ドルに相当するが、実のところ、これはイサカ市の平均的な時給より僅かながら高い。人々がドルの代わりにアワーを使うことで、イサカ市の時給そのものの底上げも狙ったのだとグローバーはいう）。言葉を換えれば、アワーの価値を担保するのは、通貨の兌換制度における金や銀ではない。そんなものは、国家通貨のドルからして、とっくの昔に見切りをつけているのである。ならば１アワーの価値を裏づけるものは何か。それは、他でもない、イサカの住民一人ひとりの１時間の実質的な労働である。イサカアワーズは、例えば銀行の

ディーリングルームの錬金術からは生まれ得ない。耕す汗や商う勤勉さが１時間ごとに生み出す価値の表象である。とすると、地域通貨の第２の特徴は、「人々の労働の実感に支えられるおカネ」ということになろうか。

労働の実感に支えられる通貨の対極にあるのが、ともすれば投機の標的になり勝ちな国家通貨（「国民通貨」とも）である。そもそもおカネには、大きくは３つの機能があるとされる。ひとつには、モノやサービスの価値基準としてのおカネの機能である。例えば、花屋の店頭に並ぶ薔薇やカスミソウの価値は「１束××円」という流通市場における値決めによって規定されている。さらに２つ目としては、交換の手段としてのおカネの機能がある。もともとは物々交換から始まったとされる人々の交易が、おカネを介在させることで格段に便利で融通の利くものになったであろうことは想像に難くない。さらに、おカネの重要な役割に、信用創造機能がある。信用創造機能の根源を突き詰めれば「利子」の存在である。利子とは、モノやサービスの交換を伴わずとも、おカネがおカネを生む魔法である。この魔法ゆえに、持てる者はさらに太り、持たざる者はいっそう細る。通貨の機能から信用創造機能を捨て去り、「価値基準としての通貨、交換手段としての通貨に特化したおカネ」というのが、地域通貨の３番目にして、あるいは最重要の特徴といえるだろう。

## 利子のないアワーでローンを組む

地域通貨に「利子がない」ことの効能は意外に大きい。例えば、コーネル大学のキャンパス近くのカフェ・オークでは、店の改装に要する費用の一部を、イサカアワーズを発行する非営利団体・イサカアワー委員会からのアワーでのローンでまかなった。ローンであるから返済からは免れない。しかしながら、利子のつかないアワーは仮に返済が滞っても、利子が利子を生み、借金を雪だるま式に増やす心配からはフリーであるのだ。たとえ費用の一部に過ぎなくても、利子フリーの債権・債務関係を結ぶ意味は大きい。債権者の立場からすれば、利子フリーはコミュニティの成員としての相手先に対する絶大な信頼や愛着である。コミュニティの当事者は、そうやすやすとは現場から逃げない。応援する側にしてもドルの余裕はないが、地域通貨でなら返済を無期限に先延ばしにするやさしさを示すことが出来る。なぜ？　なぜならコミュニティの仲間として、この先もずっと一緒にやっていきたいからだ。

カフェ・オーク：
改装にあたってはイサカアワー委員会が地域通貨でのローンを与えた

「利子のない」地域通貨は、他方でおカネの循環を加速させる。なぜなら貯め込んでも一向に増えないからである。貯蓄しても仕方がないとなれば、地域通貨は参加メンバー間をぐるぐると巡りはじめる。循環することで、発行金額の何倍もの経済効果を創出する、ことも可能だ。ただし「理論的には」である。地域通貨の真価を表現するには、ぐるぐる循環する、というよりも、新たな関係を紡ぐように確実に交わされる、というイメージの方が適切ではないかと思う。多くの場合、人は経済的な恩典を得るためだけに、地域通貨の交換サークルに加わるのではないからである。人は地域通貨を通じてコミュニティとしっかりとつながっている実感を得たい、と考える。「交わすたびにコミュニティとの絆を再確認するおカネ」というのを、地域通貨の特徴の４番目に加えたい。

## アワーの使える店としてコミュニティの一員に

例えば、イサカ市のほぼ中心でホテル業を営むスコフィールド夫妻の場合はこうだ。いまからおよそ10年ほど前、スコフィールド夫妻は1880年建造の個人邸宅を購入、イサカ市に移り住んで念願の小ホテル「ミラー・イン」の経営に乗り出した。ミラー・インの経営コンセプトはいたってシンプ

スコフィールド夫妻：「よそ者には地域通貨の意味がピーンときた」と妻のリンネットさん

ファーマーズマーケット：春の喧騒を目前に、出店を待つ各ブースはまだ空である。

ルである。歴史的なお屋敷に住まう自分たち自身の喜びを宿泊客の一人ひとりに分けてあげたい、であった。スコフィールド夫人であるリンネットの温和な人柄と勤勉さあって、家業は順調に伸びたし、夫は引き続き会計士の職にあったから、資金繰りの面でも心配は少なかった。しかし、リンネットにはひとつの不満があった。それはよその町から越してきた自分たちが、イサカのコミュニティにいまひとつ溶け込めずにいることだった。そんなある日、リンネットは町で流通しているというイサカアワーズのことを耳にする。

「コミュニティに入り込むチャンスだ！」

リンネットは即座に思い至ったという。地域でしか通用しない地域だけのおカネ。リンネットはすぐさまイサカアワー委員会※に連絡を取り、イサカアワーズの受け取りを決める。１回の宿泊につき２アワー（＝20ドル相当）を上限とすることが唯一の条件である。実のところ、アワーでの宿泊者は数えるほどしかいないという。客の多くがよそからやってくるというホテルに独特の事情からすれば当然のことである。それでもいいのだ、とはリンネット。アワーがホテル業にどれだけ有効か、ということよりも、「アワーの使える店」リストにミラー・インの名前が載って、「町のホテル」としての人々の認知を得ることの方が、直接の経済効果より数段大切なのだ、という。

## 地域通貨利用で地域の産業を見直す

町外れ、カユガ湖の湖畔には、常設のファーマーズマーケット（農家の直販所）がある。ミラー・インをはじめ、多くのビジネスが部分的なアワーでの受け取りを表明しているなか、けっして多いとはいえない「アワーを100％受け取る店」のひとつである。中央資本のチェーンストアが購買者の多くを独占しているのは、残念ながらイサカ市とて例外ではない。人々は１セントでも安い食材を求めてチェーンを渡り歩く。自然、自分たちの近郊の農家がフレッシュなだけでなく、有機栽培による環境への負荷が少なく、健康にも良い野菜や果物を提供してくれることに思い至る機会は少ない。４月ともなり、近郊の農家が一斉にファーマーズマーケットに店開きする季節になると、途端に人々は自分たちが大地の豊穣の恵みに祝福されていることに気がつくのだろう。地域通貨がなければ易々とチェーンストアに囲い込まれっぱなしであっただろうイサカの人々が、一人、また一人と「アワーを100％受け取る店」に還ってくる。そして、ときには地域の農業を再認識する。「町（＝コミュニティ）に留まるおカネ」としての地域通貨の面目躍如である。

※イサカアワーズの発行は長くポール・グローバー氏個人の手中にあったが、1997年、グローバー氏が交通事故に遭ったこと（「銀行がクルマにはねられた！」）を契機に、住民組織であるイサカアワー委員会に移譲されることになる。グローバー氏は今日、発案者であり、かつアドバイザーとしてアワーに関わっている。

## 親しい人とのやりとりで感じる愉しさ

さて、ここまでイサカアワーズにかこつけて、地域通貨の特徴を思いつくままに述べてみた。コミュニティに留まるおカネ、人々の労働の実感に支えられるおカネ、価値基準や交換手段に特化したおカネ、あるいは、交わすたびにコミュニティとの絆を再確認するおカネ、などがそれであった。ただ、これだけで地域通貨の特徴をすべて語り尽くしたとは思わない。積み残した特徴のなか、残された紙面でいまひとつ大切なものを加えよ、といわれれば迷わず「愉しいおカネ」地域通貨を上げる。地域通貨を交わすたびに感じる、あの何ともいえない愉快な感じは、円やドルではなかなかに味わえないのである。

愉しさをいうには個人的な体験を語るに限る。実は僕自身、札幌で「ガバチョマネー研究会」という地域通貨の勉強と実践の会に関わっている。この会で、不定期にやっているポットラック（一品持ち寄りのホームパーティ兼地域通貨ガバチョによる交換会）でのことだ。宴もたけなわ、札幌市内真駒内に住むメンバーの女性が近所の森で見つけたというキノコをガバチョでおすそ分けしたいという。女性いわく、キノコ狩りで難しいのは、採ったキノコが安全な、食べられるキノコであるか否か。その点、持参のキノコには絶対の自信がある、というのである。なぜなら、と女性は続ける。「このキノコは昨晩、うちの子供に食べさせたから大丈夫」

その場にどっと笑いが起きたことは言うまでもないが、と同時に、当該のキノコには驚くべき速度で値がついた（もちろん、ガバチョで、である）。後から考えれば、地域通貨の威力をメンバーの誰もが確信した瞬間ではなかったか。確かに、どんなに高額の円を支払っても、「我が子で毒見を済ませたキノコ」は市場では手に入らない。また、仮にスーパーマーケットの売り場に「我が子で毒見済み」の説明書きを目にしても、店主の悪い冗談か子供の悪戯か‥‥額面通り受け取る人はまずいまい。地域通貨でつながったメンバー間の近しさが、売り手の口上の一言ひとことに真実を嗅ぎ取るのであり、仮にそれが大言壮語であってもそれはそれでいい、喜んで騙されてみたい、と感じる。

太古、交易とは、例えば里の人々と水辺の人々とが出会う祝祭の類であっただろう。互いにとって希少なるモノを交わすことがそのまま濃密なコミュニケーションを意味した。翻って近時、物品は街に溢れ、購買にまつわる無限ともいえる選択の余地は、我々に苦渋以外のなにものをも残さない。地域通貨に立ち戻ること、それは人の産むチカラ、あるいは人が産んだモノに対する畏敬の念をいま一度払うことに他ならないのではないか、と思う。難しくはないのだ、地域地通貨で愉しくやりとりをつづける間に、自ずとその瞬間は来る。始めてみたら、あるいは、加わってみたら、あなたにもそのことが分かるだろう。

●プロフィール PROFILE

**樽見弘紀** 北海学園大学法学部助教授

1959年福岡生まれ。ニューヨーク大学公共行政大学院修士課程修了、立教大学法学研究科政治学専攻博士後期課程単位取得。テレビの脚本家・構成作家を経て、1999年より北海学園大学法学部政治学科勤務。近著に『NPOデータブック』（共著、有斐閣）、『アメリカに学ぶ市民が政治を動かす方法』（共訳、バリー・ルービン著、日本評論社）ほか。